第 13 回「全国日本語俳句コンテスト」選評

三宅節子 先生

総評 ：

学生俳句大会が再開されて三年目、今年は全体に句のレベルが上がったと感じた。学生諸君の俳句への関心と理解が深まったことと御指導された先生方のご尽力の賜物と思う。

題詠では、季題の「ぶらんこ」と「蜻蛉」は幼い頃の思い出と結び付けて詠んだ句が多かった。その中で今の自分の孤独感、夢や自由へのあこがれをぶらんこや蜻蛉に託して詠んだ句があり心引かれた。「甘蔗」は齧ると甘いという体験を詠んだものが多かった。甘蔗畑を見たことがない学生も多いかもしれない。そんな中で広々とした甘蔗畑が目の前に広がってくるような力強い句があり特選とした。

雑詠では「箆鷺」「カヤプテ」「ランタン（天燈）」など台湾季語を詠んだ句があったのは嬉しかった。自分たちの生活に密着した台湾季語をこれからもどんどん詠んでもらいたい。

気になったのは季重なりの句が多かったことだ。一句の中に二つも三つも季語があるのは避けたい。例えば、暑い夏に冷房の中でかき氷を食べるという情景、「暑い」「夏」「冷房」「かき氷」これらはすべて季語なのでこのうち一つを季語として句を詠んでほしい。季語って何？という人は先ずは『歳時記』を見てみよう。

俳句は短い。たった十七音しかない。けれど選んだ言葉がパズルのようにピタッと嵌った時、その十七音は大自然の美しさや胸の奥の思いなど十七音以上の広がりを表すことができる。それが「有季定型」の俳句の面白さだと思う。

「題詠」

第一席　甘蔗伸ぶ父の背よりもまっすぐに

青々とした甘蔗畑が目の前に広がってくる。甘蔗の高さは三メートルを超えるというが、その高さを父親と比べたことで頼もしい父親の姿とそれを超える甘蔗の雄大さが表現できたと思う。父親への揺るぎない信頼を感じさせる爽やかな句だ。

第二席　刈り残す甘蔗に夕陽火をつける

どこまでも広がる甘蔗畑が真っ赤な夕陽に染まって燃えているようだ。一日の終わりに大自然が見せてくれる雄大な情景、その中を人々は収穫の喜びと疲れを抱いて家路につく。下五の「火をつける」という表現が力強く、句を印象深いものにしている。

第三席　たそがれにぶらんこ二つ独りきり

日が暮れてあたりが暗くなり始めた頃、作者は独り公園にいる。ぶらんこは二つあるが、傍にいてほしい友人も恋人もいなくて独りきりだ。「ぶらんこ二つ」と詠んだことで情景がはっきりし、続く「独りきり」が強調されて、ぽつんとした孤独感が感じられる。

「雑詠」

第一席　相席の笑いにつられかき氷

真夏日、人気のかき氷店は大繁盛。汗を流しながら並んだ後のかき氷の美味しさに共感したのだろう、相席の見ず知らずの人の笑いに思わずつられて笑ってしまった。和やかな情景を詠んで優しさと幸福感を感じる句だ。

第二席　北の友箆鷺が来た元気かい

「黒面箆鷺」は寒い頃の台湾季語。箆鷺は毎年九月から十月頃に朝鮮半島や中国東北部から飛んできて台南曾文渓河口あたりで越冬する。台南は箆鷺の世界最大の越冬地だ。箆鷺を北の友と呼び「元気かい」と語りかける。毎年やってくる箆鷺への親しさが感じられる。

第三席　舞い上がれ私の恋とランタンよ

「ランタン」は年末年始の台湾季語。『台湾歳時記』では放天燈とある。元宵節に平渓で行われる放天燈が有名だ。願い事を書いた天燈が高く上がるほど願いが叶うという。恋の成就を願う若々しいまっすぐな思いが伝わってくる。